

一生修練

佐藤 修

何をもって「文人画」と称するのでしょうか。書をよくし、絵をよくし、加えて文をよくする、そういう人の絵が文人画であろうと思います。その作には讃があり、その筆も詩句も味わい深く、豊かな教養と人間味が相俟って観る者の心にじわりと沁みってくる、大人(たいじん)の風格、小林勇の絵こそまさに文人画の最たるものだと思います。

小林勇の生涯は岩波書店とともにありました。岩波書店を語るのに小林勇を抜きには語れません。同様に小林勇を語るのに岩波に触れずしては語れません。

小林勇が岩波に小僧として入ったのは大正9年です。昭和2年に岩波文庫が創刊されます。昭和3年小林は岩波を退社し、翌年の4月に「鉄塔書院」を興します。この鉄塔書院は6年間続き、昭和9年小林は岩波に復帰。戦後、岩波書店は雑誌「世界」を創刊、昭和21年店主の岩波茂雄が死去、昭和25年岩波映画製作所を創設、37年岩波の会長に就任。

小林勇はそうした過程で大きな人脈を築きました。安倍能成、小宮豊隆、幸田露伴、寺田寅彦、長谷川如是閑、齋藤茂吉、三木清、小泉信三、谷川徹三、吉野源三郎、池島信平…錚々たる顔ぶれです。彼らとの交友が小林勇という人物の血肉を作っていったと言っていいでしょう。

「書も絵も一生の修練」。これは小林勇の言葉です。以下は昭和46年12月、朝日新聞に掲載された随筆「夕焼け」のなかの文章です。

- ・その一生にどれだけ緊張した時間をもったか、その量の多寡によってその人間の価値が決まるように思う。
- ・すべてのものに終りがある。終わりのあることはよいことだと思う。日々終りに近づきつつ、思うことは日々新たにである。昨日よりも今日は深くものを見、その美しさを感じる。明日は今日よりも進歩する。日暮れはさびしいが楽しい。

確固たる人生を歩む地に足のついた人間にならなければいい絵は描けない、これこそ文人画家の境地だと思います。

文化とか教養とか、まともに口にするのは気恥ずかしいものですが、小林勇という人物を知り、その作品を観てみると、まさに「教養」としか言いようのない、心の奥深くに蓄積されたものが気品に包まれて伝わってきます。信濃の国が生んだ一級の文化人、小林勇の文人画の世界をご高覧下さい。

最後に、開催にあたりご遺族様、鎌倉ドゥローイング・ギャラリー様はじめ関係の皆様へ深く申しあげます。

(さとう・おさむ 梅野記念絵画館館長)

■2013年展覧会スケジュール

変更となる場合がございます。

9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8
大展示室	文人画家 冬青 小林勇展 8/31~10/20	荘司貴和子展 10/26~1/13			収蔵作品整理の為閉館	梅野 コレクション展 2/15~3/30					
ふれあい館	早世の画家 シリーズ4 篠原道生展 8/31~10/20	私の愛する一点展 10/26~1/13				今西中通展 2/15~3/16					2014年度分は、 追ってお知らせいたします。

■2013年イベントスケジュール 変更となる場合がございます。

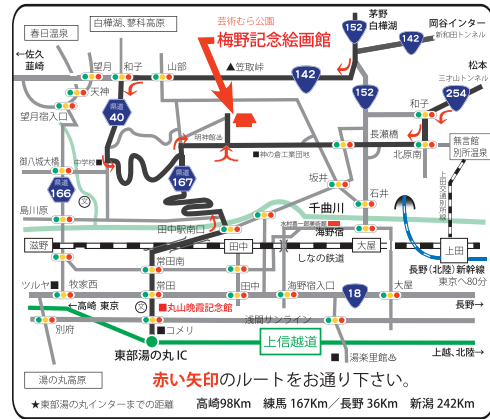
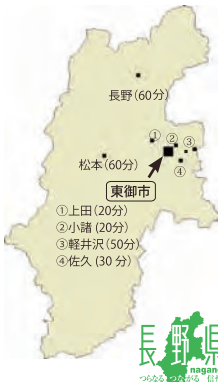
- 9/7(土) バスツアー(池袋発着) 要予約 5,000円(入館料別)  
14:00~15:00 「父を語る」小松美沙子  
15:30~16:30 ミニパーティ 詳細はお問い合わせください
- 10/6(日) 「冬青小林勇を語る」小池邦夫 要予約 入館料のみ  
14:30~15:30
- 10/12(土)~13(日) 火のアートフェスティバル(ワークショップを多数開催)

■施設情報、開館案内

とうみし  
東御市梅野記念絵画館 <http://www.umenokinen.com/>  
〒389-0406 長野県東御市八重原 935-1  
TEL0268-61-6161、FAX0268-61-6162、umenokinen@ueda.ne.jp  
開館時間 午前9時~午後5時(16:30迄にご入館ください)  
入館料 800円(高校生以上) 15名以上団体700円  
身障者割引、学校利用減免、減額制度もあります。  
休館日 9月2、9、17、24、30日 10月7、15日

■アクセス

- お車 練馬ICから2.5時間
- 鉄道 東京から最速2時間  
しなの鉄道「滋野」下車、タクシー10分
- ◆関東、北陸方面から  
上信越道東部湯の丸インターから15分
- ◆関東、北陸方面から  
北陸新幹線「上田」で、しなの鉄道乗換、滋野下車。
- ◆中部、関西方面から  
長野道岡谷インターから新和田トンネル、R142号経由で約1時間  
特急しなの号利用「篠ノ井」で、しなの鉄道乗換、滋野下車



地域の情報をラジオで発信!  
エフエムとうみ 78.5MHz

リクエスト、メッセージは  
m@fomtomi785.jp



文人画家  
冬青 小林 勇展

2013年  
8月31日(土) → 10月20日(日)

9月7日(土)「父を語る」小松美沙子  
10月6日(日)「冬青小林勇を語る」小池邦夫



同時開催 早世の画家IV 篠原道生展

## 冬青 小林 勇 年譜

- 1903年 長野県上伊那郡赤穂村(現、駒ヶ根市)の農家に生まれる。五男三女の五男。
- 1920年 17歳で上京。岩波書店の住込み店員となる。
- 1927年 岩波文庫創刊に携わる。
- 1928年 岩波書店を退き、29年鉄塔書院を設立。岩波茂雄次女小百合と結婚。
- 1932年 雑誌『鉄塔』創刊。33年廃刊。
- 1934年 幸田露伴、寺田寅彦、小泉信三のすすめにより岩波書店に復帰。
- 1935年 長男堯彦誕生。
- 1937年 長女美沙子誕生。『回想の寺田寅彦』小林勇編刊行。
- 1938年 岩波新書の創刊に携わる。
- 1941年 岩波茂雄の建ててくれた鎌倉扇ヶ谷の家に引っ越し、終生住む。
- 1942年 クレヨン画を描き、絵を描き始める。幸田露伴が鎌倉の離れを冬青庵と名付け、後に雅号を「冬青」とする。
- 1943年 和風堂主人馬場一郎と親しくなる。中谷宇吉郎と二人で絵を描くようになる。
- 1945年 5月治安維持法違反の嫌疑で逮捕、拷問を受ける(横浜事件)。8月29日釈放される。9月妻子の疎開先信州に行き32種の秋草の絵(秋庭花譜)を描く。
- 1946年 岩波茂雄死去。岩波書店支配人になる。初代中村吉右衛門と親しくなる。
- 1949年 岩波書店が株式会社となり、専務取締役役に就任。
- 1950年 株式会社岩波映画制作所創設、代表取締役専務就任。『岩波写真文庫』創刊。
- 1955年 初の随筆集『遠い足音』(文藝春秋)刊行。翌年日本エッセイストクラブ賞受賞。
- 1956年 『蝸牛庵訪問記』(岩波書店)刊行。
- 1958年 リウマチを患い生涯悩まされる。
- 1959年 第1回「中谷宇吉郎・小林勇画展」(文春画廊 以後隔年で第6回まで開く)。
- 1960年 『小閑』(東京創元社)刊行。
- 1961年 元旦より手習いを始め終生続ける。第2回「中谷宇吉郎・小林勇画展」を開催。『雨の日』(文芸春秋)刊行。
- 1962年 中谷宇吉郎死去。岩波書店取締役役会長就任。
- 1963年 第3回「故中谷宇吉郎・小林勇画展」を開催。『惜櫟荘主人』(岩波書店)刊行。
- 1965年 第4回「冬青小林勇展」開催。10月より翌年12月まで外国にいる娘夫婦に121枚の絵はがきを描き送る。『竹影』(筑摩書房)刊行。
- 1967年 第5回「冬青小林勇展」開催。
- 1968年 『彼岸花』(文芸春秋)刊行。
- 1969年 第6回「冬青小林勇展」開催。『冬青小林勇画集』(中央公論美術出版)刊行。
- 1971年 『山中独臆』『隠者の楯』(文芸春秋)刊行。第7回～13回まで「冬青小林勇展」を吉井画廊で開催。
- 1972年 岩波書店・岩波映画を退く。『随筆書画一如』(求龍堂)刊行。リウマチのため左手で描く。
- 1973年 『人はさびしき』(文芸春秋)刊行。第8回「冬青小林勇展」開催。
- 1974年 信濃毎日新聞に自伝『一本の道』を自筆の絵入で53回連載。『夕焼』(文芸春秋)刊行。
- 1975年 1月より翌年9月まで芸術新潮に『冬青庵楽事』連載。第9回「冬青小林勇展」開催。『一本の道』(岩波書店)刊行。
- 1976年 日本経済新聞から『厨に近く』を自筆の挿絵入で連載。リウマチに痛風を併発し、左手で描くことが多くなる。
- 1977年 『冬青庵楽事』(新潮社)刊行。第10回「冬青小林勇展」
- 1978年 第11回展「冬青小林勇小幅展」開催。『厨に近く』(中央公論社)を刊行。
- 1979年 『続冬青庵楽事』(芸術新潮)1年間連載(後、『赤い鞆』と改題)第12回展開催。
- 1980年 『赤い鞆』(新潮社)刊行。第13回「冬青厨房小品展」開催。腎不全で入院。
- 1981年 3枚の赤い牡丹の絵と数枚の書を残し、11月20日死去。享年78歳。



白椿



菜の花



紅白牡丹



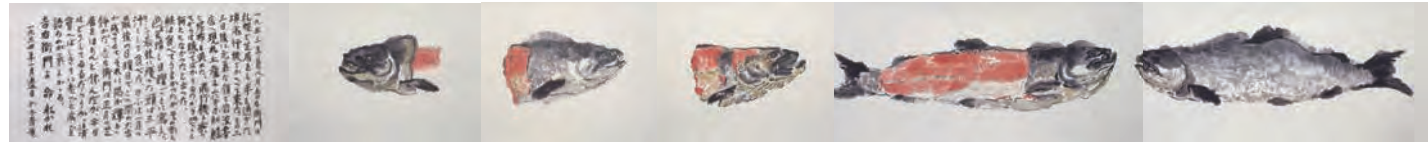
信楽壺



高坏・果物



大根・唐辛子



吉右衛門の鮭(巻物)



鯰(巻物)